

2026 年度 外国人留学生特別選抜（後期）文学部英米文学科 出題意図

1 試験日 2026 年 2 月 1 日

2 科目 英語

3 出題意図

ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』の冒頭数段落を試験問題に選んだのは、その最初のページが一見単純に見える一方で、実際には幅広い文学的スキルを要求するからである。小説は一見平凡で、ほとんど退屈な場面から始まる：川岸で姉のそばに座る少女が、絵も会話もない本に退屈している。しかしこの静かな導入部でさえ、語り手の視点や口調、想像と現実の関係性について微妙な疑問を投げかけている。学生は、三人称の語り手が読者をアリス視点に巧みに同調させる手法、自由間接話法が語り手と登場人物の境界を曖昧にする技法、そして退屈が後に続く異常な出来事の触媒となる過程に気づかねばならない。

この一節は言語への感受性を試す絶好の機会でもある。キャロルの散文は、白ウサギの登場によって穏やかな描写から突然の荒唐無稽へと移行する。この日常的な生き物は自然主義的でありながら、同時に不可能なほど人間的だ。文のリズム、遊び心のある控えめな表現、そして幻想への漸進的な高まりは、注意深い精読を必要とする。生徒はプロットの要約に頼らず、語彙・構文・皮肉に注意を払わねばならない。特に英語が母語でない生徒にとって、このテキストの慣用表現と微妙なユーモアは、高度な英語理解力を公平かつ厳しく測る尺度となり、ニュアンスを理解できる者と文字通りの翻訳しかできない者を区別する。

さらに冒頭部は、好奇心・論理・時間・アイデンティティという小説全体に響き渡る中心テーマを前面に押し出す。アリスがウサギを追って穴へ降りる場面は、安全で合理的な世界から、通常のルールが通用しない領域への移行を劇的に描いている。受験生はこの象徴的な下降を認識し、キャロルが執筆したヴィクトリア朝時代——科学、分類学、そして子供の無垢さに魅了された時代——との関連性を理解できるだろうか？この一節は、文体の技法だけでなく、歴史的・文化的背景についての考察も可能にする。

最後に、『不思議の国のアリス』の冒頭部は、英国児童文学の正典において、またナンセンス文学のより広範な発展において重要な位置を占める。試験官がこれらの段落を選んだのは、学生にジャンルに関する問いを考えさせるためである：この小説は単なる児童向けファンタジーなのか、それとも大人の論理や教育を微妙にパロディ化しているのか？受験生は、テキストの詳細と広範な解釈のバランスを取る能力を示し、知的好奇心と批判的自立性を示すでしょう。これらは大学レベルでの英文学研究に不可欠な資質です。以上